

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

自己表現育成のためのカリキュラムデザイン案： 大学における中国語教育のための自己表現プロジェクト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): 自己表現育成, 中国語教育, カリキュラム・デザイン案 キーワード (En): 作成者: 白, 煜 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00008030

自己表現育成のためのカリキュラムデザイン案

— 大学における中国語教育のための自己表現プロジェクト —

白 焔

要 旨

近年、21世紀型の人材育成として、キーコンピテンシーを核とした発信型の人材が求められるようになり、教師中心の授業 (teacher-centered) から学習者中心の授業 (students-centered) への変化が注目されるようになった。これは同時に、教師が一方的に学習者に知識を詰め込む知識伝達型の授業モデルから、学習者の自主性を育てる学生参加型、情報発信型、そして自己発見型の授業モデルへの変化でもある。本論では、「授業」、「練習問題」、「宿題」のすべてにおいて、第二外中国語学習者が自己表現を行うために一貫した関連性をもたせ、効率的に自己表現育成を実現させるうえで適していると考えられる「自己表現育成のためのカリキュラム・デザイン案」を提案する。

キーワード：自己表現育成、中国語教育、カリキュラム・デザイン案

1. はじめに

1.1 自己表現育成のためのカリキュラム・デザインの提案について

筆者は、2016年～2017年に関西地区、北陸地区、北海道地区の7大学で共通科目として中国語を第二言語として学んでいる中国語学習者513名を対象に中国語学習者の学習意識調査の分析を行った¹⁾。

表1 第二外中国語初級学習者

第二外中国語初級学習者	人文科学系 (中国文学以外)	154	外国語系 (中国語以外)	159	513
	自然科学	47	教育・教育養成系	36	
	医学・歯学系	5	社会科学系	87	
	一般教養系	10	芸術系	5	
	経営系	10	家政学・生活科学系	10	

その結果、まず、第二外中国語学習者のコマ数の大半が2コマであるにも関わらず、多くの学習者は構造を中心とした授業や総合的な中国語の能力よりも、日常的に使える中国語、将来的に仕事の場面でも使えるような実践的な中国語会話能力を目指していることが分かった。しかし、現状では、教育の視点においても、学習の視点においても構造を中心とした授業に偏った授業が多くみられる。したがって、これまでとは異なる思い切った角度から、授業やのニーズに適した実践的で会話に特化した教育を実現する方法を検討する必要がある。

同様に、限られた授業数のなかで、ピンインや声調の学習に関し、苦手意識を持っている点を踏まえ、学習者が発音の誤用を過剰に意識せずに、自由に自己表現ができるような授業手法を考える必要がある。

限られた授業数であっても、学習者にとって興味深い教材の内容としては、自分に関することを相手に伝えたり、表現したりするのに使える身近な教材、旅行に役立つ会話の多い教材の割合が比較的高い傾向にある。しかし、実際に授業で使われている教材をみると、学習者の日常生活には馴染みの少ないトピックや設定場面も多い。

実際、学習者が学んだことをもとに自己表現を行うためには、その課のトピック（テーマ）に従って、教材中の登場人物を自分自身に置き換えるステップが必要である。自分であればどのように相手に伝え、自己表現をするのか、その点こそが重要である。また、レベルに応じて、自分がテーマに沿って話したいことを考え、それまでに学んだどのような表現を、どのような文法事項や発音で表現すればできるか考える作業が必要である。学習者は、それを実際に口に出して発信することで、うまく発信できたことと発信できなかったことに気づき、中国語の表現能力を段階的に習得してゆくのである。

1.2 従来の第二外中国語授業の一般的な流れ

これまで中国語教育では、日中・中日翻訳練習、簡体字の並び替え練習、声調を正しく漢字の上に振る練習、空欄に正しい漢字を入れて埋めるといった練習問題をこなし、それに答えることができれば、1課分の授業が理解できたと考えられることが多かった。しかし実際には、学習内容をしっかりアウトプットできているか学習者にも判断できず、学んだことを通して自分自身について簡単な中国語で表現できているかさえ分からないということもしばしば見受けられてきた。

また、学習者が中国語を学んだ結果、それぞれができるようになったことを発揮する機会や場、すなわち、努力した結果の成果物となるものもほとんど存在しなかった。学習者一人ひとりが努力の結果をクラス全体で共有し、表現するための機会や場を設けることで、学習者中心の授業となり、学習者自身のモチベーションを高めることにもつながるだろう。

本章では、これまで行われてきた第二外中国語学習の弱点を見直し、学習者が単なる機械的な

練習だけで授業を終わらさず、そのもう一歩先につながる手法として、「自己表現プロジェクト」と名づけるものを中国語の授業に導入したい。これは、学習者の会話表現の活動を活性化させ、クラス全体でシェアすることにより、自己表現能力を育成するためのプロジェクトである。

2. 「自己表現プロジェクト」のための教材について

(1)語学学習を行うにしても、授業を行うにしても、また復習をするにしても、教材は中国語学習の大事な要素のひとつである。それぞれの課で学んだトピックごとの語彙や表現を無駄にしないように、また、それらの語彙や表現をしっかりと定着させるため、トピック（テーマ）は1課ごとに立てるのではなく、4課ごとに相互に関連性をもたせて立てるものとする。

(2)設定場面とトピックは学習者が自分のことに置き換えたときにイメージしやすいように、日本の大学での日常生活や日本の行事を中心に取り入れる。また、調査では旅行や将来の仕事に少しでも中国語を使いたいという希望もみられたため、単なる旅行ではなく、インターンシップ生として中国で働くというストーリーを取り入れる。

(3)本教材で使用する単語と文法事項については、中国語教育学会が1年90時間対象の第二外中国語学習者向けに提案しているものを使用する。

2.1 「自己表現プロジェクト」のための教材内容について

本論文が提案する自己表現育成のための「第二外中国語自己表現プロジェクト」は、次のような内容で構成される。教材に登場するのは、主人公の大学1年生の「田中光」、そして学習者自身を表す「あなた」である。この2人の会話内やストーリーを通し、内容を自分に置き換えて「自己表現プロジェクト」を行うことにより、最終的には初歩的な中国語で自分自身を紹介し、自己表現できるようになることを目指す。なお、このプロジェクトについては、全課で6回ほど（「自己表現プロジェクト①～⑥」）設けることとする。

(1) 第1課から第3課は発音に関する内容である。

第1課から第3課にて基本的な中国語の発音の基礎を身につける

(2) 「自己表現プロジェクト①」のための教材内容—第4課から第7課まで

第4課から第7課までを「大学生生活編①」と題し、これまでの中国語の教材のように、学習者が自分自身に置き換えにくい内容ではなく、設定場面とトピックは日本の大学における日常生活とした。教材の中で出てくる会話内容やストーリーにより、初歩的な中国語で自分紹介、家族のこと、好きなこと等に関し、自己表現できるようになることを目指す。表現した内容は録画し、簡体字による字幕もつけさせることで、会話のみならず文字によるアウトプットの力も習得させる。

(3) 「自己表現プロジェクト②」のための教材内容—第8課から第11課まで

第8課から第11課までを「大学生活編②」と題し、第4課～第7課と同様に場面を日本の大学に設定し、それと関連するトピックを取り上げた。しかし、内容に関しては、単に自己紹介や好きなこと、家族のことだけでない。自分のスケジュールや天気や時間のことなど、さらに表現の内容の幅を広げ、最終的にはパワーポイントを活用して、大学生活の中の1日のスケジュールを語るができるようにする。

(4) 「自己表現プロジェクト③」のための教材内容—第12課から第15課まで

第12～第15課までは「日本を巡る編 part 1」と題した。これまでの中国語教材は、中国国内の文化や生活を伝えることにページを割くものが多くみられた。しかし、中国語を学習する日本語母語話者にとって、日本という国の特色や、注目されているものを通して、中国語で自己表現できることも非常に大事であると考えられる。また、日本のことを相手に伝えるためには、情報を調べることも欠かすことができない。したがって、調べたことを中国語でまとめる作業や、中国語母語話者にインタビューを行い、その内容を自分たちの考えと比較しながらまとめて発表することも行う。これらは、3～4人のグループで行うプロジェクトとする。

(5) 「自己表現プロジェクト④」のための教材内容—第16課から第19課まで

第16課から第19課までは「日本を巡る編 part 2」と題した。日本の新幹線、日本の家庭料理、日本のアニメーション、日本で人気なスポーツなど、世界の中でも注目される日本の事象について学んでいく。最終的には、第12課～第15課までの内容も含め、初めて日本を訪れる中国語母語話者を想定して、日本について紹介する。そのためにはどのような風物や場所を紹介すべきか、3～4人のグループで考え、ポスター作りを通して自己表現することを目指す。

(6) 「自己表現プロジェクト⑤」のための教材内容—第20課から第23課まで

第20課から第23課は、「異文化理解編 part 1」と題した。普段の日常生活の中で中国語、中国の人々、そして中国の文化に接することが日々ますます増加している。しかし、そのような環境にいなながらも、中国に対する印象やイメージに関しては、実際の中国とは違う点も多くみられる。そこで、第20課～第23課は、教材中のストーリーに、実際に日本にある中華料理店、支払方法の変化、日本にいる中国留学生の日常生活などのトピックを取り入れた。設定場面は日本であるが、トピック内容は中国の“人”や“文化”に関連するものにするすることで、私たちが、普段の日本の生活の中で抱えている中国のイメージをより実像に近づける課とした。

第20課から第23課までの「自己表現プロジェクト異文化理解編 part 1」として、学習者に中国人観光客が日本を訪れた際の旅行スケジュールを考えてもらう。それを文章化した上で自己表現をさせる。さらには、組み立てたスケジュール案を Web 上にアップロードし、クラス全体で閲覧できるようにする。スケジュール案の中で、最も優れた旅行プランを立てたグループを全員で選出する。

中国人旅行者にお薦めの観光スポットはどこにするのか、旅行中の1日をどのように過ごすのか、どのような食事が好ましいのか。これらのプランを立てる中で、どうすればより日本を楽しんでもらえるのかということを考えることになる。また、相手の視点から物事を考える異文化理解の一步となる。さらには、日本のメリットを自分なりに考えて表現することも貴重な学びである。

(7)「自己表現プロジェクト⑥」のための教材内容—第24課から第26課まで

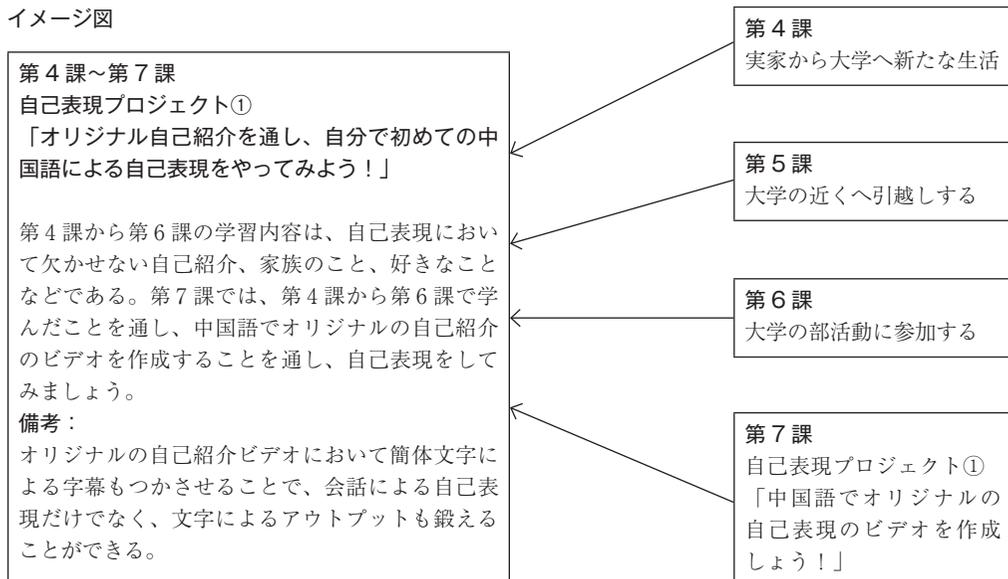
多くの第二外中国語学習者は、将来的に多かれ少なかれ中国語が役立つのではないかと考え、授業を履修している。だが、現在多く見られる中国語の教材では、仕事で使う中国語は難しいため、初級学習者には適さないと考える傾向が強い。そこで、第24課～第26課を「異文化理解編 part 2」と題し、初級学習者の多くが大学生であることも考慮に入れ、教材のテーマを中国におけるインターンシップとした。中国にある日系企業で主人公がインターンシップを行うことを通し、また、中国での様々な経験を通し、自分がどのような気持ちや感情を抱いたか表現させる。第二外中国語学習の1年間の総仕上げとして、自分が中国語を学んで変わった、または成長したと感じる点をスピーチにまとめて発表し、自己表現育成の締めくくりとする。

2.2「自己表現プロジェクト」の学習イメージ —第4課から第7課までを例に—

「自己表現プロジェクト①」のための教材内容

第二外中国語教育のための「自己表現プロジェクト①」—大学生生活編 part 1—

イメージ図



3. 実施要件について

目的：

本授業は、第二外中国語学習者を対象とした中国語会話授業である。その中でいかにして、学習者の自己表現育成を向上させていくかを目的とする。

対象者：

第二外中国語教育学習者 約15人前後のクラスを対象としたもの。それぞれの課で「自己表現プロジェクト」の発表もあるため、少人数を想定している。

学習時間と授業形態：

週2コマ、1年60コマ、90時間の第二外中国語学習者を対象とした中国語会話授業。

注意事項

本授業は、自己表現育成のためのプロジェクトを対象とした中国語授業であることをオリエンテーション時に学習者に話しをする。

宿題：

プロジェクトの内容に合わせて、それぞれのプロジェクトをこなすための宿題を随時課してゆく。基本的には、それぞれの課の到達目標にある内容を録音し、教師に添付ファイルとして毎回送付する。

「自己表現プロジェクト」に関する評価基準：

学生ひとりで行うプロジェクトとグループで行うプロジェクトがある。

それぞれ、発表者が表現したことに関し、A～Cの3つの評価項目について、それぞれ1～5の点数をつける。

評価項目：

- A 興味深い発表内容であった
- B 大きな声を出して話せていたか
- C メモを見ずに話せていたか

評価点：

- 1. 大変良い
- 2. 良い
- 3. 普通
- 4. あまり良くない
- 5. 悪い

4. 「自己表現プロジェクト」の目次について —第4課から第7課までを例に—

「学んで、実践して、自己表現できることを体現する実践的な中国語教材」

目次

第1課 発音①	138
第2課 発音②	139
第3課 発音③	142

大学生活編 part 1 基本的な自己紹介や挨拶を通して自分自身を表現する
設定場面：日本

第4課 実家から大学へ新たな生活	145
到達目標：自己紹介ができる。挨拶ができる。	
第5課 大学の近くへ引越しする	150
到達目標：自分の家族のことについて中国語で話せる	
第6課 大学で部活動に参加する	159
到達目標：自分が好きなことや趣味が中国語で話せる	
第7課 自己表現プロジェクト①	166

自己表現プロジェクト①

「中国語でオリジナル自己紹介のビデオを作成してみよう！」

第4課から第6課の学習内容は、自己表現において欠かせない自己紹介、家族のこと、好きなことなどである。第7課で、中国語でオリジナルの自己紹介ビデオを作成することを通し、自分ではじめての中国語による自己紹介をやってみよう！

4.1 自己表現育成のためのプロジェクト① –第4課から第7課までを例に–

第7課 自己表現育成のためのプロジェクト①

「中国語でオリジナルの自己紹介ビデオを作成してみよう！」

前提

「自己表現プロジェクト」教材の第4課から第6課まで学んだことを通し、プロジェクトを完成する。練習問題で出された内容や宿題で出された内容を思い出してみよう。

目標

中国語で、自分なりのオリジナル自己紹介のビデオを作成すること。

注意点

各自、オリジナリティを出すために、撮影器具と撮影場所は自由（家でも学校でも可）。自己紹介の内容に関しても自由（家族の写真を持ってきて紹介するのもあり、そして、家族と一緒に撮るのも可）。

その他

内容としては少なくとも以下の三点を含むこと。

- (1)自分の名前
- (2)家族のこと（何人家族ですか、家族がそれぞれ好きなことは何ですか？）
- (3)自分の好きなことや趣味について：

最後に、ビデオで話した中国に簡体文字の字幕をつけましょう。

なお、ビデオ撮影する時は、最終的にみんなの録画したものを流してもらい。録画する際、必ず、最初に“你好”と始めて始まり、最後に“谢谢”を入れて下さい。

例)

- 1)大家好 我叫…… （中国語で簡体字の字幕をつける）
- （ご家族が目の前にいる）我家有○○口人 这是我爸爸和妈妈。
“在我妈妈旁边的是我哥哥和弟弟”など家族について、彼らの趣味など
（中国語で簡体文字の字幕をつける）
- 2)我喜欢打篮球。 （中国語で簡体文字をつける）
- 3)我喜欢看电影。など （中国語で簡体文字をつける）
- 谢谢

4.2 学生に対するフォローについて

(1) 学生が発表したいことに関して、中国語でどう話したり書いたりするか分からない場合の対応。学生が書きたいことが未習得の表現である場合、どのように書いたらよいか分からないと質問があった場合、次のようにフォローすることができる。この自己表現プロジェクト①「中国語でオリジナルの自己紹介のビデオを作成してみよう！」は発表ではなく、あらかじめ自分たちが録画してきたものを流し、クラス全体で観て、評価する。したがって、学生は、自分自身が話したい内容を中国語でどのように表現するのか、教師から学び、またはどのように書くのか教師に聞いてもよい。最終的に自分の言葉にして、自己表現プロジェクト①のオリジナルビデオにすること。また、教師側が、学生が発表したいと考えている内容に関し、自己表現プロジェクト①の範囲内であれば(自分や家族のことについての紹介)制限をかけないこと。

(2) 学生からオリジナルビデオ作成の際、歌やダンスなどの要素をビデオに入れたいという質問があった場合、家族に関係がある中国語の歌や、中国の民族ダンスなど、中国語や中国文化に関連のあるものについては可とする。

評価

クラス内の全体で評価基準を決めて、オリジナル自己紹介ビデオを撮ってから、全員でビデオの内容を評価する。評価基準は、次の A～G とする。本来設定されている下記の評価基準の他に足したい評価基準の内容があれば、下記の A～G の他にクラス全体で基準評価にどのようなものを付け加えるのか相談してもよい。

評価基準

それぞれ、発表者が表現したことに関し、次の A～G の7つの項目に関して、1～5の点数を与える(1.大変良い 2.良い 3.普通 4.あまり良くない 5.悪い)。

- A. 興味深い発表内容であった
- B. 大きな声をだして話せていたか
- C. メモを見ずに話せていたか
- D. 発音がきれい
- E. ビデオの画質がきれい
- F. 発表の簡体文字で書いた字幕がよい
- G. 発表内容の構成がよい

5. 「自己表現プロジェクト」のための序説

本編の「自己表現プロジェクト」の教材は、これまでの日本で出版された中国語の教材には見られなかった形のものであり、学習者の自己表現育成を画期的な方法で提案した。これまで

のように、学習者は受動的に授業を受講し、中国語による自己表現を実際に行ったことがないままであることが多い。理屈では、中国語母語話者と多くコミュニケーションと取ること、よく話すことで上達していくことは誰でも分かっているが、どのようにして話かけたらいいのか分からない。話しかけるのが恥ずかしい、何を話したら良いか分からないなど、様々な考えが頭の中に浮かび、結局のところ躊躇してしまうということが多いためである。

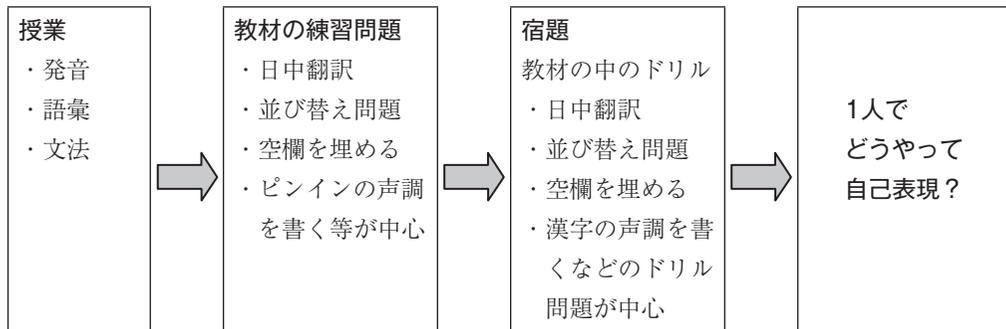
このようにみると、日本の大学における中国語教育の問題点は、教材と授業の両方において、学んだことを通して実際に表現する場がない点、さらには、そのような現状があまり論じられずにきたという点である。

従来、授業・教材の練習問題・宿題という各要素が、体系的に中国語の学習目標に向かって構成されておらず、それぞれが単独で成り立っていたことも否定できない。したがって、教材を作成するにあたって、次の観点を本プロジェクトに取り入れた。

- (1)学習者は、実際に自己表現と繋がりがある授業が必要である。
- (2)授業において、自己表現を練習する、そして実現させる場が必要である。
- (3)授業中だけでなく、宿題にも自己表現の要素を取り入れたものを取り組ませることにより、自分ができることとできないことに気づき生まれ、更に、中国語で表現することを習慣化することにつながる。
- (4)授業から宿題、そして自己表現へと、学習活動全体に一貫性を持たせることで、着実に自己表現育成の準備ができ、順序にこなしていくことで、学習者自身の自信につながる。
- (5)プレッシャーやストレスを感じないように、クラス全体で活動する。「自己表現プロジェクト」の評価基準は、教師だけでなく、クラスの全員が参加する。こうすることでゲーム感覚が生まれ、学習者が楽しく参加できる気持ちになれる。

本編は、「自己表現プロジェクト」を取り入れた教材が、クラス全体のひとりひとりが楽しく参加でき、中国語による自己表現の力や機会を実現できるように考えられた新しい形の中国語教材である。

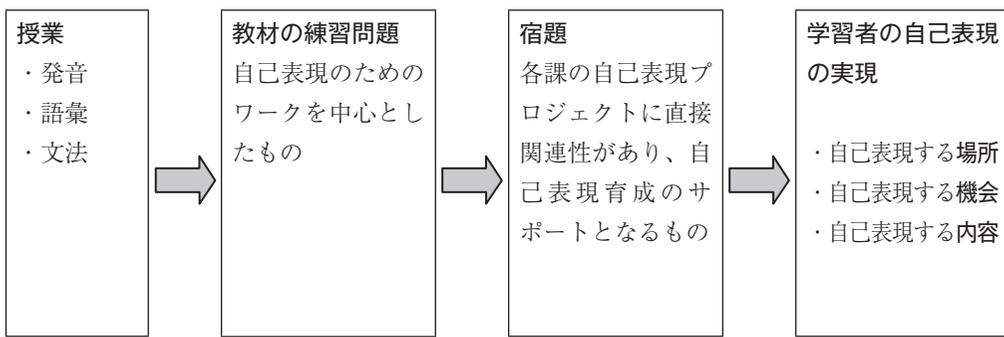
5.1 従来の学習プロセス



これまでの授業では、教材の練習問題と宿題が同じようなものであることが多い。このような流れでは、授業と宿題の往復のみで、教師側も学習者側も満足しているが、実際に学習者に自己表現させようとしても、学習者がどうしたらいいのか分からないため、結局、自己表現が実現せずに終わることがパターン化してしまう。

5.2 本論文が提案する「自己表現育成」のための学習プロセス

「授業」「練習問題」「宿題」はすべて、学生が自己表現を行うために一貫した関連性をもたせ、自己表現育成を実現させる。



6. 本編における教師の役割

本章では、本編における教師の役割は、通常の授業時における役割と自己表現プロジェクトの役割の二つに分けて考えることができる。

6.1 自己表現育成プロジェクトのための通常の授業における教師の役割

筆者は、2016年度から2017年度にかけての調査¹⁾により、大学において第2外中国語学習者の多くが、中国語の会話能力を中心に向上させたいというデータが多かったことを受け、本編における通常授業における教師の役割を以下のように考える。

- (1) 日々の通常の授業を通し、学習者の中国語学習に対する動機やモチベーションを高める。
- (2) 学習者のどのような能力を向上させたいのかの問いに対する、方向性やビジョンを持ち、学習者を主体とした授業を行うことができる。
- (3) これまでのような教師を主導とした教育ではなく、積極的に自己表現を図ろうとする意欲を生み出すきっかけになる自己表現プロジェクトに繋がる一貫性（授業、教材、宿題、自己表現プロジェクト）のある授業を通して、学習者の自己表現力の向上をはかる。

- (4) IT 機器や単語カードや、図や絵など様々な言語学習に必要な道具を使って、学習者が自ら考えて表現力を向上させることに近づける。
- (5) 外国語学習の習得には、日頃の積み重ねが必要であるため、学習者が目標にたどり着くまで、小テストで理解度をチェックしたり、できないところをアドバイスする機会も設けたりすることで、自信をつけさせることも重要である。

6.2 自己表現育成プロジェクト時における教師の役割

- (1) 授業、教材、宿題、そして自己表現プロジェクトへとつながる一貫性のある中国語学習は、これまでの授業で行われなかったものであるため、それぞれの課の自己表現プロジェクトをどのようにしめしていくか、学習者に説明や例を出す。(発表時の声のトーンや発表内容の組み立て方、宿題から表現プロジェクトの繋げ方)
- (2) 自己表現プロジェクト発表時は学習者がメインであるが、学習者が必要以上に不安になったり、緊張したりしないように、学習者が発表しやすいような流れをつくる。
- (3) 評価基準は、どれだけ声調の発音がいいのか、あるいは、形式的文法構造で話せたり書けたりしているだけで評価するわけではなく、準備の度合いや日々の積み重ねが分かる部分でも評価することを伝えること。
(例：発表時にメモを見ずに発表できているか、または声を出して発表できているのか)
- (4) 自己表現プロジェクトの評価の基準は教師が準備するが、評価する人は、教師ひとりではなく、教師と学習者全体で評価することを説明する。また、評価基準に関しても、他に設ける必要がある基準はないか学習者と決めること。

7. おわりに

2000年を境にして、欧米を中心に「知識伝達型」の教育が見直され、「能力育成型」の授業が重視されるようになった。欧米では OECD による「PISA リテラシー」、「DeSeCo キー・コンピテンシー」が取りまとめられている。EU による「CEFR ヨーロッパ参照基準枠²⁾」も同じ潮流に属する。そして、国内においても、「ジェネリック・スキル」「生きる力」「社会人基礎力」「学士力」等の概念が相次いで提唱され、「リテラシー」や「コンピテンシー」といった「新しい力」に注目が集まるようになる。

これらの概念に共通しているのは、時代や社会の要請に応じてゆける「汎用的能力」の育成である。すなわち、「何を知っているか」だけではなく、「知識を実際に活用できるか」、「何ができるのか」が問われるのである。この流れを受けて、語学の授業においても、「知っている」だけではなく、実際に「使える」ことこそが重要になってきているのである。このような能力

重視型の教育は、グローバル化が加速する世界においては欠かせないものである。

このような時代の流れをうけ、我々、中国語教育に携わる教員も、「教養から実用へ」、「知識から能力へ」の転換にしっかり意識を向け、時代の潮流に応える教育を行う必要がある。

人は、コミュニケーションをするとき、何を語りたいたらうか。それは、おそらく、まず自分自身のことではないだろうか。それをきっかけにして、相手のことも知り、興味が広がり、交流の輪が拡大するのではないだろうか。つまり、自己表現は人間のコミュニケーションの場において非常に重要で、欠かせない要素であり、そこからすべて始まると考えられる。

本論においても、そのような観点から、そして、この時代のニーズに対するひとつの答えとして、「自己表現型のカリキュラム・デザイン」案を取りまとめた。まだまだ問題点は数多く存在するとは考えているが、第二外中国語教育のひとつの新しい試みとして提案したい。今後は、このカリキュラム・デザインがどこまで有効であるのか検証し、実際に適用した上で、問題を抽出し、完成度を高めたいと考える。

注

- 1) 筆者は、2016年～2017年に関西地区、北陸地区、北海道地区の7大学で共通科目として中国語を第二言語として学んでいる中国語学習者513名、中国語を専攻する初級中国語学習者74名、計587名を対象に中国語学習者の意識調査を、13項目に分け、分析を行った。本編の自己表現プロジェクトは、その分析結果をベースに提案したものである。
- 2) 外国語教育における1つのグローバルスタンダード、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が策定したCEFR「ヨーロッパ言語共通参照枠」（Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment）である。これは外国語教育において、従来のように教師を中心としたものから学生を中心としたものへと転換し、コミュニケーション能力の育成に重点を置くべきであるという考えを打ち出したものである。

参考文献

- 郁文堂編集部（2002）「中国語教科書に関する課題」『日本の中国語教育-その現状と課題・2002』 pp.181
日本中国語教育学会
- 岩居弘樹（2014）「Ipadを活用した学生によるビデオ作成」『中国語教育』第12号 pp.38-42 中国語教育学会
- 植村麻紀子（2013）「21世紀の中国語教育を考える-グローバル社会を生きる人材を育てるという視点から」
『中国語教育』第11号 pp.1-19 中国語教育学会
- 王松（2013）「中国語学習における教師の指導行動と動機づけ、学習方略との関連：日本人大学生を対象に」

- 『国際学研究』第2巻 第1号 pp.107-114
- 小野秀樹（2002）「東京都立大学における中国語教育の現状」『日本の中国語教育-その現状と課題・2002』pp.103 日本中国語学会
- 緒方哲也（2009）「中国語教育におけるコミュニカティブ・アプローチの導入について：中国語・中国文学を専攻としない中国語学習者(1)を対象とした実践と報告」『東北大学中国語学文学論集』第14号 pp.77-95
- 大西博子（2008）「これからの第二外国語教育の方向性-中国語統一テキスト開発の取り組み」『語学教育部ジャーナル』(4) pp.13-24
- 岡崎洋三（2014）「自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチによる自己創作」『大阪大学国際教育交流センター研究論集多文化社会と留学生交流』第18号 pp.55-66
- 笠巻知子（2012）「リサーチに基づいた自己表現アプローチ法を使ったコミュニケーション能力向上の試み」『樟蔭学園英語教育センターフォーラム』(1) pp.7-10
- 郭春貴（2007）「大学における第2外国語の中国語教育の位置づけ」『広島修大論修』第48巻 第1号（人文）pp.165-179
- 胡玉華・馬叢慧（2014）「タスクを取り入れた中国語授業の試み」『中国語教育』第12号 pp.151-167 中国語教育学会
- 白煜（2019）「自己表現育成のための外国語教育—中国語教育にける教材と指導法を中心に」『関西外国語大学大学院研究科 博士論文』 pp.79-96 pp.97-116
- 村上公一（2016）「中国語教材における文化とコミュニケーション」『中国語教育』第14号 pp.24-29 pp.30
- 耿直（2011）「改革开放以来对外汉语教材编写研究综述」『河南社会科学』第19巻 第4期 pp.176-179
- 郭春貴（2014）「1周2节课的2外汉语教学模式探討—以广岛修道大学为例子—」『中国語教育』第12号 pp.1-10 中国語教育学会
- 胡金定（2014）「日本の漢語教育現状」『言語と文化』第18巻 pp.125-130
- 胡玉华（2016）「“3×3+3”模式的汉语教学—综合学习活动的尝试」『中国語学会』第14号 中国語教育学会
- 胡土雲（2008）「我的漢語教学課」『中国語教育』第6号 pp.203-206 中国語教育学会
- 辛平（2013）「日本本土汉语教材特征分析—以三套日本初级汉语教材为例」『国际汉语教育』2013年第02期 pp.144-151 pp.182

（ばい・ゆう 短期大学部講師）